

図形の印象評定に及ぼす他者の表情や関係性の影響

—PsychoPy を用いた実験心理学的研究—

A Study Influence of Other's Face Expressions and Relationship Impression on Objects

-An Experimental Study of Psychology Using PsychoPy-

井川結華^{*1}, 沖林洋平^{*1}

Yuika IGAWA^{*1}, Yohei OKIBAYASHI^{*1}

^{*1} 山口大学教育学部

^{*1} Faculty of Education, Yamaguchi University

Email: a003jbu@yamaguchi-u.ac.jp

あらまし：本研究では、無意味図形の横に顔写真を対呈示すると、顔写真の人物の表情や親近性が無意味図形の印象評定にどのように影響するのかを検討することを目的とした。実験の結果、既知顔の笑顔表情が、対人依存傾向が高い人物や低い人物の印象評定にポジティブな影響を与えるという結果が明らかになった。

キーワード：印象評定、表情刺激、親近性、対人依存傾向

1. はじめに

他者とコミュニケーションをとる際、顔という視覚刺激は必要不可欠なものである。「顔を伺う」という言葉があるように、私たちは相手の顔を見て、目の前にいる人物の感情や気持ちを推測している。顔刺激には、視線方向や顔の角度など様々な要素があるが、その中でも表情は相手の感情や気持ちを推測するのにとても役に立つ刺激である。竹原・野村(2004)によると、身振り・接触・姿勢・歩行などの人間の非言語行動（ノンバーバル行動）の中でも、顔に表われる表情は特に情報量が多いとされており、対人コミュニケーションの中心的役割を担っているといえる。

先行研究では、喜び表情または嫌悪表情を示す他者が存在することで、対呈示された無意味図形の好意度に変化するという結果が示されている（布井・吉川, 2016）。本研究は、この先行研究を参考に、無意味図形の横に顔写真を対呈示すると、顔写真の人物の表情や親近性が無意味図形の印象評定にどのように影響するのかを検討することを目的とした。また、無意味図形の評定と対人依存欲求尺度や bigfive 尺度の結果を照らし合わせ、パーソナリティと印象評定の関連性を検討する。

2. 方法

本研究の調査は 2023 年 11 月から 12 月に実施された。

本研究の調査参加者は大学生 37 名（そのうち 23 名が既知顔の人物と同じ学科の学生）、社会人 3 名の計 40 名であった。

既知顔とは、同じ学科の被験者 23 名と日頃から関わりのある人物の顔画像のことで、未知顔とは、被験者 40 名と全く関わりのない人物の顔画像のことである。

実験は 1 人ずつ実験室で行った。まず、実験参加者には 10 個の無意味図形を 5 段階（1:全く好きではない～5:非常に好き）で評定してもらった。その後、無意味図形の周りに既知顔、未知顔の写真を 1 枚ずつ呈示し、図形の評定を行う 1 刺激呈示条件の実験と無意味図形の周りに既知顔、未知顔の写真を同時に 2 枚呈示し、図形の評定を行う 2 刺激呈示条件の実験を行った。その後、対人依存尺度や bigfive 尺度短縮版を載せたアンケートを実施した。

3. 結果

3.1 全体の分析

全体のデータを分析した結果、1 刺激呈示条件では、表情と親近性の主効果が見られたが、2 要因の交互作用は見られなかった ($F(1, 39) = .37, ns, \eta^2 p = .01$)。2 刺激呈示条件でも、未知顔表情と既知顔表情の主効果が見られたが、2 要因の交互作用は見られなかった ($F(1, 39) = 3.09, ns, \eta^2 p = .07$)。

3.2 親近性高群の分析

本研究では、既知顔の人物と関わりのある被験者と関わりのない被験者を設定している。そのため、既知顔の人物と関わりのある被験者である親近性高群を取り出して検討した。

親近性高群のデータを分析した結果、1 刺激呈示条件では、表情と親近性の主効果が見られたが、2 要因の交互作用は見られなかった ($F(1, 22) = .68, ns, \eta^2 p = .03$)。2 刺激呈示条件でも、未知顔表情と既知顔表情の主効果が見られたが、2 要因の交互作用は見られなかった ($F(1, 22) = .34, ns, \eta^2 p = .02$)。

3.3 対人依存傾向クラスターを用いた分析

親近性高群の対人依存欲求尺度でクラスター分析を

行い、無意味図形の印象評定における、被験者の対人依存傾向と親近性・表情の関連性を検討した。親近性高群の対人傾向クラスタは、対人依存傾向が高いクラスタ1と対人依存傾向が低いクラスタ2に分類された。

このクラスタを用いて分析を行った結果をFigure1に示す。1刺激呈示条件では、表情と親近性、対人依存傾向クラスタの主効果が見られたが、2要因の交互作用は見られなかった。 $(F(1, 21) = .78, ns, \eta^2 p = .04)$ 。2刺激呈示条件では、角変換値を用いた分析を行った。未知顔表情と既知顔表情の主効果が見られたが、対人依存傾向クラスタの主効果と2要因の交互作用は見られなかった $(F(1, 18) = 2.07, ns, \eta^2 p = .10)$ 。

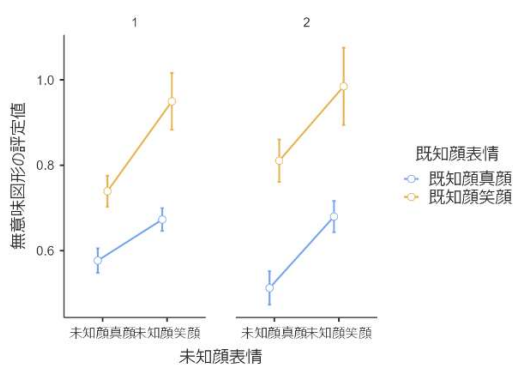


Figure1. 2刺激呈示条件におけるクラスタごとの推定周辺平均値

未知顔の真顔表情と既知顔の笑顔表情の組み合わせ、未知顔の笑顔表情と既知顔の真顔表情の組み合わせを対呈示したときの無意味図形の評定値を比較するために、対応あり t 検定を行った (Figure2)。分析の結果、未知顔の真顔表情と既知顔の笑顔表情の組み合わせを対呈示した場合の評定値が有意に高かった $(t(19) = 4.45, p < .001, d = 1.00, 95\% CI [0.45, 1.53])$ 。このことから、対人依存傾向が高いクラスタ、低いクラスタ共に、既知顔の笑顔表情が被験者の印象評定にポジティブな影響を与えることが示された。

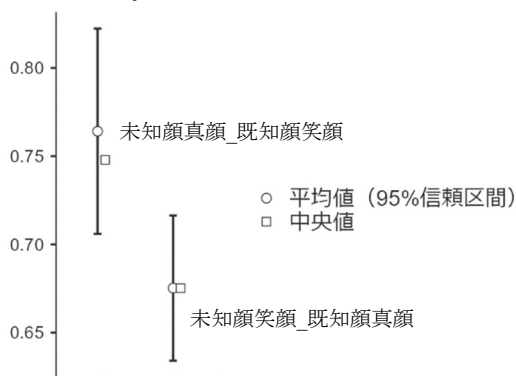


Figure2. 未知顔真顔_既知顔笑顔と未知顔笑顔_既知顔真顔の評定値の比較

4. 考察

本研究では、既知顔の笑顔表情が、対人依存傾向が高い人物や低い人物の印象評定にポジティブな影響を与えるという結果が明らかになった。しかし、顔写真の表情や親近性が被験者の印象評定に影響を与える理由までは明らかにすることができていないため、今後検討する必要がある。

本研究では、対人依存傾向が高い人物が既知顔の笑顔表情に影響を受ける、という結果を得ることができた。先行研究では、対人依存傾向が高い人物は、他者の笑い顔の視線方向に対して敏感に察知することができるという結果が示されている(石川・山口・澤・高田・大久保,2014)。この結果から、対人依存傾向が高い人物は、対人依存傾向が低い人物よりも、既知顔の笑顔表情に過剰に影響を受けるのではないかと考えた。例えば、普段から関わりのある人物が無理な誘いをしてきても断れないといった弊害が生じる可能性がある。このように、既知顔の笑顔表情に影響を受けるということは必ずしも良いことばかりではないという危険性も指摘する必要があると考える。

また、本研究では既知顔・未知顔のように先行研究では行われていなかった親近性という要素を加えて実験を行った。結果として、印象評定において、既知顔の笑顔表情からポジティブな影響を受けるという結果が得られたが、これは、既知顔の人物と被験者との信頼関係や日頃の関わり方も影響しているのではないかと考える。本研究に協力してもらった既知顔の人物と親近性高群の被験者は、日頃から関わりの多い関係性であった。しかし、既知顔の人物を見たことはあるが話したことのない被験者や、既知顔の人物と顔見知り程度の被験者であれば印象評定に既知顔の笑顔表情があまり影響しない可能性がある。このことから、既知顔の人物との関係性も印象評定に影響を与えるかどうか、今後検討する必要がある。

参考文献

- (1) 竹原卓真, 野村理朗: 「顔」研究の最前線(pp.62-83), 北大路書房 (2004)
- (2) 布井雅人, 吉川左紀子: 表情の快・不快情報が選好判断に及ぼす影響—絶対数と割合の効果— 心理学研究, 87(4), 364-373 (2016)
- (3) 石川健太, 山口美和子, 澤幸祐, 高田夏子, 大久保街亜: 対人依存傾向が視線方向判断に与える効果, 心理学研究, 85(1), 87-92 (2014)